

## オープニングスピーチ

**金英**：金英と申します。土曜日ですので皆さん朝寝坊をしたいところだったと思いますが、朝早くから参加していただき心よりお礼を申し上げたいと思います。

ただいまより開会式を行います。本日のシンポジウムは、東京大学社会科学研究所の大沢真理教授の研究チームとソウル大学日本研究所の共同で企画されています。

では日本研究所所長の韓栄恵（ハン・ヨンヘ）教授、そして大沢教授のごあいさつを承り、延世大学の李惠炅（イ・ヘギョン）教授の特別講演を承りたいと思います。

まず韓所長よりごあいさつを申し上げます。

**韓栄恵**：ただいまご紹介にあずかりました日本研究所所長の韓栄恵と申します。土曜日の朝早くよりご参席賜りました皆様方に厚くお礼を申し上げます。実は少し心配していました。でも本当にこのようにご関心を示していただき、ご参席を賜り、本日の学術大会を主催している機関の者として幸いに思っています。皆様方にお礼を申し上げたいと思います。

本日この学術大会を開くようになった背景を申し上げることで、ごあいさつにかえさせていただきます。

日本研究所は2004年に独自の研究機関として独立しましたが、その後2008年に、韓国学術振興財団で行っている

SK21事業という10年間支援をいただく大変大きなプロジェクト機関として指定されました。その研究所のアジェンダが「現代日本生活世界の研究」というテーマです。「日本生活世界の研究」といっても、生活世界をミクロ的な意味の生活世界に限定するものではなく、大きな構造的なマクロ的な変動の中における具体的な人間の暮らしの場で、それがどのようにあられ、また人間がそのような変化に対してどのように主体的に行動しているのかを調べるために、生活世界という概念を導入したわけです。

研究そのものは非常にグローバルな、またリージョナルなものからスタートし、ローカルなところまで多様なものを含んでいます。知識、観念から、現場の具体的な構造に至るまで、多様なものを含む研究方向を定めさせていただいています。

そのような意味から、本日、日本と韓国のジェンダーの観点から見る不平等と貧困の問題を扱うようになったことは、本研究所の研究方向としては、人間の暮らしの中で最も重要な部分の1つですので、非常に時宜にかなったテーマであると考えています。

このようなシンポジウムを開くようになったのは、実は本日ここにリーダーとして来ておられる東京大学の大沢真理教授のご提案によって始まりました。また研究チームの全体的なテーマ、枠組みも、大沢真理教授がリードしていらっしゃる研究チームのテーマに基づいて、

このように準備しました。そういう意味から、私たち日本研究所としては、楽に座ったままで素晴らしい研究成果をここで皆さんとシェアすることになり、非常に感謝しています。私どもが得をしたような気がします。感謝したいと思います。今度は大沢真理教授にこの恩返しができるような機会を必ずつくりたいと思っていますので、よろしく願いいたします。

招待の文書にも書いておきましたが、ご存じのように、アメリカに端を発した経済危機がまだ続いていますし、非正規職問題や貧困の問題が日韓両国において拡大しています。私たち日本研究所の立場から見ると、過去の日本研究は非常に発展論的な過程からモデルの中に傾いていましたが、現在の日本研究は、どういう観点からどういう意味をそれに与えながら研究しなければいけないのか、新しく模索すべき時期にあります。そういう点から、貧困問題を日本と韓国がともに考えることは、かつてはそれほど重点を置きにくかった視点だと思いますが、今後共有できるようなテーマがこれから開かれることを期待します。

本日このような学術大会の契機をつくってくださった大沢真理教授とほかの方々のご紹介は各発表のときにご紹介したいと思いますので、ここでは長くは申し上げません。

また基調講演をしてくださるために、延世大学の李惠旻教授も朝早くからこのようにお見えになっています。また日本研究チームの皆さんも一緒に参加していますし、ドイツからいらっしゃったシャイア教授、そして国内、釜山、ソウルな

どからご参席賜りました発表者の先生、討論者、司会者の先生の皆様に厚くお礼を申し上げたいと思います。

そして何よりも早朝より討論と一緒に参加してくださっているフロアの皆様にもお礼を申し上げます。できれば最後の総合討論までご参席賜りたいと思います。また皆様の貴重なご意見も承りたいと思いますので、本日の学術大会がその1つの出発点となるように皆様のご協力をお願いいたします。ありがとうございます。（拍手）

**金英：**韓所長、ありがとうございます。それでは東京大学の大沢真理教授をお迎えしてごあいさつを承ります。よろしく願いいたします。

**大沢：**皆さん、おはようございます。土曜日の朝早くからおいでいただきありがとうございます。このような催しを持つことができたことについては、今ごあいさついただきましたソウル大学日本研究所の韓榮恵所長以下皆様に、大変お世話になっています。また李惠旻教授がこのように土曜日の朝からお出ましいただいたことに、とてもありがたく感激しています。また準備の過程では、今日のスピーカーで総合司会でもある金英（キム・ヨン）釜山大学教授が大変努力をしてくださいました。

私どものグループは何なのか、先ほども韓榮恵教授からご質問をいただきましたが、始まったのはもう10年以上前です。イギリス、アメリカ、ドイツの比較研究の中に日本も入れたいから、ということとで私に声をかけていただいたのが

1999年です。イギリスのシルビア・ウォルビー教授やアメリカのハイディ・ゴットフリート教授が、中心的メンバーでした。このグループの研究は2007年に、*Gendering the Knowledge Economy Comparative Perspectives*(co-edited by Sylvia Walby, Heidi Gottfried, Karin Gottschall and Mari Osawa, Basingstoke and New York: Palgrave Macmillan)という本を、成果として出版しました。そのあとグループメンバーが少々変わり、そのときから金英さん、相馬直子さんにも入っていただいています。

そういうグループでもう10年以上にわたって研究してきましたが、特に私が金英さんから、日本と欧米の国だけの比較ではなく、きちんと韓国や、それから中国や台湾も入れた比較研究をすべきではないかということを強く意見され、なるほどそうであると考えたところから、このリニューアルされたプロジェクトが始まっています。

私がこの場所に立つのは約1年ぶりで、去年は東京大学社会科学研究所とソウル大学日本研究所の合同ワークショップ、研究交流をしていく上でのキックオフの催しを、させていただきました。東京大学社会科学研究所は日本研究の比較

総合を大きなミッションの1つにしています。近年になってますます意識されているのが、日本だけに閉じこもった日本研究ではなく、アジアの中の日本、少なくとも東アジアの中の日本を比較総合的に研究していくことが、研究所としてのミッションを果たす道筋であろう、ということです。

その意味で、今日は韓国のさまざまな研究テーマの先端にいらっしゃる研究者の方々と、日本及び韓国、そしてドイツのケースも入りますが、比較の意見交換ができることを大変喜び楽しみにしています。長い1日ではありますが、どうぞよろしく願いいたします。フロアの皆様からのインプットも大いに期待しています。どうもありがとうございました。

(拍手)

**金英**：大沢教授、ありがとうございました。大沢教授がジェンダーという側面での社会科学研究で日本を代表する研究者とすると、李恵炅教授も同じ分野で韓国を代表する研究者でいらっしゃいます。恐らく皆様方も同意してくださると思います。

それでは、李恵炅教授をお招きしてお話をお伺いしたいと思います。